

## ■あか牛改良の歴史（「あか牛五十周年のあゆみ」より）

### 1. 改良までのあか牛

熊本県の各地には、朝鮮半島から入りこの地域の気候風土に順応し土着した、淡褐色を主とした牛が飼養されていた。これらの牛は赤牛、肥後牛の名で、または地域によりそれぞれ矢部牛、阿蘇牛、球磨牛などと呼び慣わされていた。

特徴としては、体質が強健で粗食に耐え、性質は温順で使役に適していたが、体格が小さく晩熟で特に後躯の発達が劣り皮膚は緊縮したものが多かったという記述がある。また、毛色に関しても褐色が主体であったが、中には黒色、灰色、班毛、虎毛のものも見られていた。

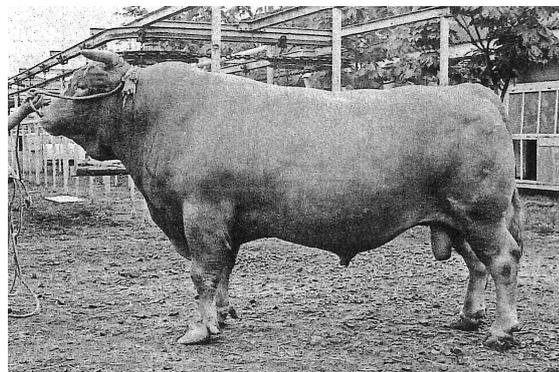
### 2. 外国種による改良

明治33年農商務省は外国種との交雑により和牛を改良するという方針を定め、ブラウンスイス種、シンメンタール種、及びその雑種などの種牛が多く県内にも貸し下げられた。当初は利用度が低かったが、それらの産子の体格が大きく、熟成も速まり、後躯の充実が著しいことがわかると次第に外国種、特にシンメンタール種の種付頭数が増加していった。特にルデー、スイス、チンゲルホルン、ブルタ及び川瀬(雑種)などの種雄牛が活躍した。また、あか牛との戻し交配をすることで白斑は体表部から消え次第に褐毛単色となっていった。

### 3. 優良系統及び改良に貢献した種雄牛

#### ・重玉（高11）

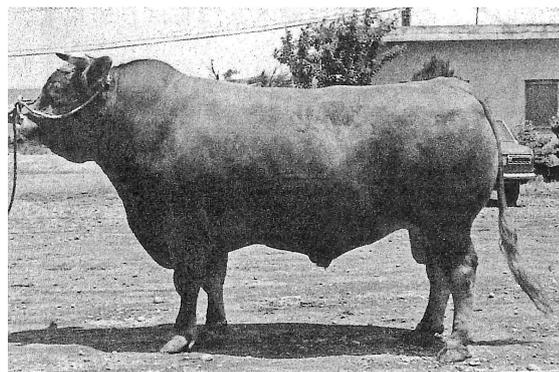
重玉は昭和37年熊本県鹿北町で生産され、その後阿蘇に移ってから肉質改良に大きく貢献し多くの種雄牛を輩出している。子孫で種雄牛となったものは100頭以上にも上る。



重玉(高11)

#### ・重宝（高40）

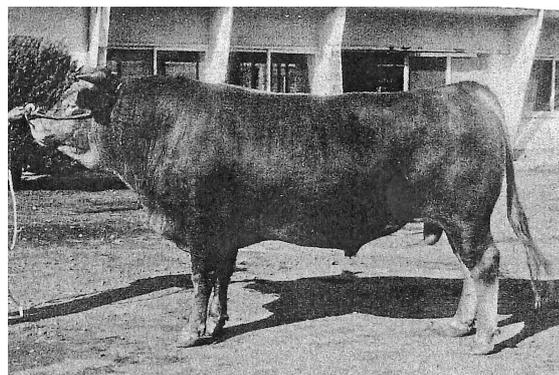
重宝は重玉産子の種雄牛としては、やや小型で伸びに欠ける種雄牛であったが、前・中躯が充実し被毛が特に優れていた。また、産子の肉質は極めて優秀であり定評があった。主に阿蘇地域で活躍した。



重宝(高40)

### ・第二重川(高53)

第二重川は昭和50年代初期の枝肉共進会で優秀性が確認されて以来人気急上昇した。体積があり均称がよく肉用種として理想的な体系を備えていた。また、肉質にも優れその特長は第一重川、第三重川及び第十重川などを通して後代に引き継がれた。



第二重川(高53)

### ・重波(高48)

重波は父方及び母方祖父が重玉で半兄弟交配により作出された。

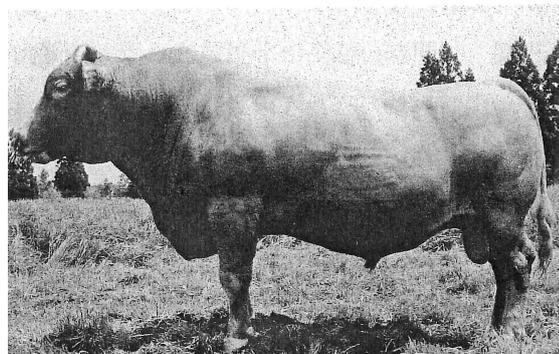
当初は福岡県の種畜場で供用されていたが途中から阿蘇に移った。

体格は大型で体深があり抜群の資質を有する反面、前肋の充実をやや欠くのが特徴である。また、肉質向上に大きく貢献して阿蘇牛の名を高めた。

### ・春玉(高44)

春玉は秋田県畜産試験場で繁用され同県のおか牛改良に貢献した牛として知られる。

体格はやや小型で後駆の充実を欠くが、被毛は柔らかく肉質のよい子牛を多く生産した。

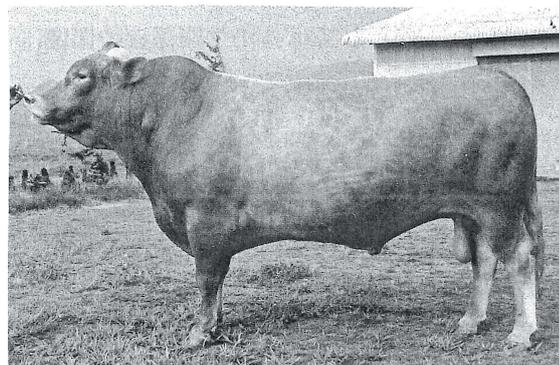


春玉(高44)

### ・光武(高58)

光武は昭和46年熊本県鹿本郡で生産された。近代的なおか牛の体型を代表するものとして高い評価を持つ祖父「第五光浦」に匹敵する均称、体積を持ち、また尻の形状がよく資質全般に良いのが特長である。

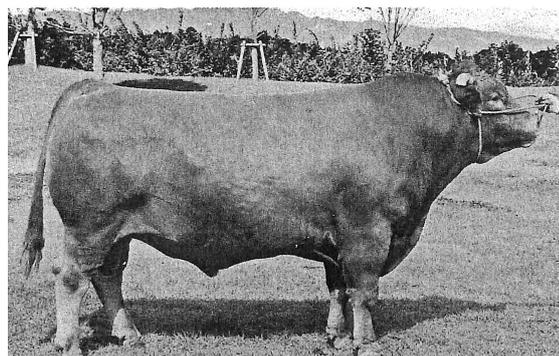
肉質面ではロース芯が大きく形がよい点が評価される。



光武(高58)

### ・光重ET(育高1)

光重ETは昭和61年の熊本県肉畜共進会に下益城郡から出品された農林水産大臣賞を獲得した肉牛の母から受精卵移植によって作られた。平成4年に選抜され、それ以後肉質の面では群を抜いた成績を残し、20年以上たった現在も脂肪交雑の育種価では上位に位置している。



光重ET(育高1)